

『フランシス・プーランク』

伊藤美由紀

演奏会でプーランクの作品を聴く機会は多くはない。没後 50 周年である 2013 年、プーランクの作品が取り上げられるこの機会に彼の作品を改めて体験してもらえたらと思う。

パリで生まれ育ち、活躍したフランシス・プーランク(1899~1963)は、アヴェロン出身の父方の祖先からはカトリック精神を受け継ぎ、パリ出身の母方の祖先は代々職人であり芸術を愛する心を受け継ぐ。両親ともに音楽愛好家であり、子供の頃から生活のなかに芸術があふれる裕福な家庭で育った。

母の影響により 5 歳からピアノを習い始め、15 歳の時、当時ドビュッシーとラヴェルを弾きこなすピアニストのリカルド・ヴィニェスに師事する。ペダルの微妙な扱い方を含めてピアノに関する多くの知識を学んだ経験は、後の彼のピアノ作品に多大な影響を与えた。作曲もピアノを使用することが多かった。《無窮動》(1918)を含む初期ピアノ作品は、ヴィニェスに初演されている。3 つの小品による《無窮動》は、18 世紀のクラヴサン作品からのエスプリと、サティの影響とともに、古典的な響きに意外性のある不協和音が効果的に使われている機転に富んだ作品である。1930 年代にピアノ曲の大半は書かれており、《8 曲の夜想曲》は、ショパン、シューマンらの影響が感じられ、詩的で情熱的な旋律で満ちている。同時期の本人の気に入っている 15 曲からなる《即興曲》は、ドビュッシー、シューベルトの影響を思わせる小品を含み、全曲ユーモアと優美な旋律による小品集である。最後の 15 番は《エディット・ピアフ讃》の表題をもつピアノによるシャンソン風ワルツである。彼のピアノ書法は、歌の伴奏から生まれたと本人は言う。

作曲家としてのデビュー作品は、サティに捧げられたアンサンブルと歌（バリトン）による《黒人狂詩曲》(1917)である。5 つの楽章からなり 3 曲目は、疑似アフリカ言語で書かれたテキスト「ホノルル」を使用しユーモアのある作品に仕上げている。サティ、ラヴェルに関心をもたれ、この作品の成功により、ディアギレフからバレエの委嘱をもらい、ストラヴィンスキーには、楽譜の出版を勧められる。彼は、生涯に声楽作品、世俗的、宗教的合唱曲、オペラを含む膨大な声による作品のレパートリーを残し、フォーレ、ドビュッシー、ラヴェルに続くフランス歌曲の歴史を築いた。11 歳の時にシューベルトの《冬の旅》

に出会い熱中したのが誘因かもしれない。若い頃から、ヴェルレーヌ、マラルメ、ボードレールらの詩に夢中になっていた。最初の歌曲《動物詩集》(1919)は、アポリネールの詩による。彼が書いた150曲のうち、35曲がアポリネールの詩により、33曲がエリュアールの詩による。カリグラム(詩のテーマが、並べられた行で視覚的に表現されているスタイル)で有名なアポリネールの詩による《カリグラム》(1948)は、円熟期に書かれた7曲の作品である。コクトーの3つの民謡に作曲した《コカルド》(1919)は、ストラヴィンスキーのオーケストラや、サティの《パレード》から影響をうけた作風で、コクトーの自由奔放なスタイルにあった暗示的でサーカス、ミュージック・ホールを示唆するような滑稽な要素を含んだ作品となっている。シュールレアリスム詩人であるエリュアールによる7人の同時代の画家たち(ピカソ、シャガール、ブラック、ファン・グリス、クレー、ミロ、ジャック・ヴィヨン)の各々の画風について描写した7つの詩による《画家の仕事》(1956)は、それぞれの画家のスタイルを的確な音楽表現で言葉のリズムにあった作品に創造している。他にも同時代のマックス・ジャコブ、ルイズ・デュ・ヴィルモランらの詩人とも交流があった。韻律法、言葉の意味に忠実に従った歌曲作曲家であった。ピアノパートは、声楽パートの詩情を表現しており、ペダルの微妙な踏み替えについてのこだわりは、自分が期待するほどにペダルを使用出来る者はいないだろうと言っているほどである。舞台作品のための付随音楽も多数書いており、劇作家ジャン・アヌイの《レオカディア》の為の音楽(1940)の第3幕の《愛の小径》は、シャンソン風のワルツで、ソプラノ歌手の定番曲となっている。また、父方の祖先から受け継いだ宗教的な精神に基づき、親友の作曲家が亡くなった1936年から最後の作品(1961)に至るまで宗教的合唱曲を書き続けている。彼は音楽大学には行かず、兵役後の21歳の時にミヨーの勧めでシャルル・ケクランに対位法をみてもらう。バッハのコラールの主題をもとに4声のフーガを書く練習を勧められて夢中でやったことが、後ほど合唱曲を書く際に役にたったと本人は回想する。

プーランクは、サティのバレエ作品《パレード》(1915)を聴いて以来、彼に傾倒し交流を始め、彼のピアノ曲の理解のある演奏者の一人でもあり、彼のピアノ作品《2つの遺作の前奏曲とグノシエンヌ》をオーケストラに編曲(1946)もしている。サティとのつながりをきっかけに、6人組のメンバー(タイユフェール、オーリック、デュレー、オネゲル、ミヨー)で1919年から仕事を始める。批評家が、ロシア5人組にならってフランス6人組と命名したことがきっかけとな

る。共通の美学があったわけでも、音楽的スタイルが似ていたわけでもないが、反ロマン主義、反印象派の精神で、旋律と対位法への回帰という新古典主義の漠然とした概念のもとに活動する。その頃、ロシアバレエ団の主宰であるディアギレフから委嘱を受けて、バレエ作品《牡鹿》(1923)を制作する。脚本はコクトー、舞台、衣装はマリー・ローランサン、振付、主演はニジンスキーの妹であるニジンスカの豪華なメンバーによる初演であった。サティの影響を受け、ローランサンの絵画からヒントを得た躍動感にあふれる陽気な作品である。

プーランクの作品は、調性があり旋律が作品の全てを支配し構成する。和声、リズムに斬新さはないものの、簡潔な形式の中で、直観に従い歌い続ける。言葉の響きに対し繊細に反応し、声として音楽的に表現する天性をもった作曲家であった。